

## 小児急性虫垂炎（手術症例）の病型別臨床的検討

伊東 威 瀧野 泰秀 長谷川修三 川元 俊二  
吉田 康洋 稲田 一雄 井上 徹 関 克典  
瀧上ひろみ 柳澤 純 木田 吉俊 吉田 尊久\*  
池田 靖洋\*\*

福岡徳洲会病院 外科

\*福岡徳洲会病院 病理

\*\*福岡大学医学部第一外科

**要旨：**小児急性虫垂炎手術症例154例を微小変化・カタル群（54例）、蜂巢炎群（76例）、壊疽・穿孔群（24例）の3群に分けて臨床的特徴を比較検討した。6歳未満で壊疽・穿孔群の割合が高かった。微小・カタル群と蜂巢炎群の間に Blumberg 徴候で、蜂巢炎群と壊疽・穿孔群の間で下痢、筋性防御、発熱の有無に有意差を認めた。白血球数、CRP も病型の進行の一指標となった。発症から手術までの時間は蜂巢炎群で最も短く、手術時間、入院期間は病型が進行するにつれて長かった。超音波所見は、蜂巢炎群で虫垂描出率が高く、壁層構造消失、周囲異常像、腹水は病型の進行とともに高率に認められる傾向にあった。CT 所見の虫垂腫大、壁 enhance、炎症波及像、腹水は、微小・カタル群と蜂巢炎群間で有意差を認めた。小児急性虫垂炎は炎症の進行が速く、診断はもとより、病型（重症度）の判定が困難であることが多い。各病型の臨床的特徴を把握したうえで、総合的に診断を行い、迅速に治療方針を決定することが重要である。

**索引用語：**急性虫垂炎，小児，超音波検査，CT 検査